



でんでんむしむし かたつむり

学校長 岡本 敏樹



今回は播州弁の話でした。その中で福崎出身の民俗学者・柳田国男の著書「蝸牛考（かぎゅうこう）※蝸牛とはカタツムリ」について少しふれていました。今回はその続きです。

デンデンムシはカタツムリですが、その他にも全国には100を超える呼び名があります。柳田は全国各地の呼び名を調べました。その概略をまとめたのが次の表です。

九州	四国	中国	近畿	中部	関東	東北
ツブリ	カタツムリ	マイマイ	デンデンムシ	マイマイ	カタツムリ	ツブリ

規則性が見えてきます。近畿地方のデンデンムシを中心として、その隣の中部地方と中国地方ではマイマイ、その次に遠方の関東地方と四国地方では共通してカタツムリのように、日本地図で表すなら近畿を中心とした同心円状に同一方言が分布します。

これが、アホ、バカ、タワケ、ダボなど侮蔑する語も同様の分布をします。関西でのアホ、関東でのバカが2大勢力ですが、バカは九州でも使います。名古屋のタワケは、山口県や四国でも使います。これまた同心円状の分布でその中心は近畿のアホです。

これが何を意味するかというと、日本の言葉の中心地・発信地が近畿であることです。近畿の中でも中心地はかつての都のあった京都です。京の都での新語・流行語が近畿一帯に広がり、さらに中部や中国四国へとさらには関東や九州へと、京を中心として同心円状に伝わっていきます。テレビもラジオもない人の会話だけで伝播していた時代、その伝わり方はゆっくりです。今では、古い時代の言葉ほど東北や九州など京都から遠いところに残っており、新しい言葉ほど京都に近いところにあります。つまり、デンデンムシとアホは京都発の最新の呼び名です。最新と言っても数百年前まで遡るかもしれません。

今なら発信地は東京で、それはテレビやSNS（ツイッターやインスタグラムなど）により、瞬時に日本中に広がります。今年も「ゴン攻め」・「リアル二刀流」・「黙食」など、新語が生まれ瞬時に全国に広がりました。柳田国男の「蝸牛考」は現在の言葉では当てはまりません。

カメムシの方言

カメムシの方言は、この辺りでは「カエダ」「カイダ」あるいは「ガイダ」です。冬が近づくと屋内に入ってきます。洗濯物に紛れ込むことも多く、知らずに身につけると悪臭発生の大惨事となります。「カエダ」は我々の生活に大きな影響を与える存在です。



姫路南部では「カエダ」でなく通常昆虫名の「カメムシ」で呼んでいます。姫路の町中ではカメムシは少なく悪臭被害も少ないです。特別な存在でないのも、特別な呼び方もないのでしょう。「カエダ」「カイダ」「ガイダ」という方言は、播磨の中でも山間部で

使います。山間部の限定版方言と言えます。

デンデンムシの場合は、全国どこにでもいて、誰もが日常的に目にします。子どもが捕まえ遊ぶものなので、子どもどうしや親子間でも会話にのぼるでしょう。しかし、それに比べてカメムシの場合は山間部に限定的です。地域性が強いので、デンデンムシ・カタツムリのような京都中心の同心円状の方言分布でなく、日本各地でのブロック別の方言分布になっているようです。

川魚の方言

川魚の中で、「アユ」や「ウナギ」は全国どこでもアユ・ウナギで通ります。商品として流通するほどメジャーであるので、呼び名も全国共通です。

おもしろいのは、「雑魚（ざこ）」たちです。ここでもカエダと同じく、「蝸牛考」の法則は当てはまりません。各地のブロック別の方言分布なのですが、呼び名がバラエティーに富んでおり、しかも少し場所が変わるだけで名が変わります。雑魚（ざこ）ほど地域性が強いです。

◆ヨシノボリの方言「テッチン」「イシクボ」「ゴリ」



左の画像がヨシノボリです。実際の大きさもこのぐらいで、大きいものでも5 cm程度です。拡大したのが下の画像です。

拡大すれば分かるように、これはハゼの仲間です。姿はドンコと似ていますが、ドンコの方はもっと大きく15 cmほどになります。ちなみにドンコもハゼの仲間です。



ヨシノボリは川底の岩の上をちょんちょんと跳ぶように移動するので、ザルが一つあれば簡単にすくうことができます。ザルを水中の岩に当てておき、そこに向かってヨシノボリを手で追い込んでやるのです。私は幼児期に母の洗濯について行って（昔話のように川で洗濯していた時代でした）、洗濯の横で捕まえて遊んでいました。

さて、生物名としての標準和名はヨシノボリですが、この言葉を聞いてもピンと来ません。下牛尾の河内では「テッチン」と言っています。これが神河町の粟賀あたりでは「イシクボ」といいます。テッチンとは全く異なる呼び名です。私は以前に粟賀小学校（現神崎小学校）に勤務したことがあります。子どもが「おじいちゃんはいしクボ捕りの名人や」と言っていて、「イシクボ？」と意味が分かりませんでした。「イシクボ」＝「テッチン」だと知って納得しましたが、この瀬加では「イシクボ漁」＝「テッチン漁」はしませんね。私が幼児期にしていたように、子どもがすくって遊ぶ程度です。ところが、神河町の山田～福本あたりの越知川では、このイシクボをさかんに捕獲しており「イシクボの佃煮」は郷土料理の一つとなっています。たいそう美味だそうです。どのような道具を使って捕るのかは知りませんが、この瀬加とは違う食文化がそこにはあるのです。

イシクボという呼び名とその食文化は、越知川水系に特有なのかもしれません。私は寺前小学校にも勤務していました。上小田から寺前を流れるのは小田原川ですが、ここでは「イシクボ」とは言っていなかったように思います。

福崎では、「テッチン」でも「イシクボ」でもなく、「ゴリ」と言うように聞いたのですが、その記憶に自信はありません。

ヨシノボリを例に挙げたように、少し場所が変わるだけで魚の呼び名が変わります。魚によっては、この瀬加の中でも寺家と山添とでは呼び名が変わるかもしれません。そもそも、生息域が異なる魚種があります。

この瀬加での生息魚種とその呼び名を調べたいものです。その聞き取り調査を計画します。